女四書　諭読　下

女論語巻下目録

事夫章第七　付　郤缺妻之事　孟光之事
訓男女章第八　付　魏緝母之事
営家章第九　付　文伯母之事
待客章第十　付　絡秀之事　孔明妻之事
和柔章第十一

越後
小須戸町
[illegible]所
長澤屋店

守節章十二　付
荘公后の事　李氏が事　秋胡子妻の事

女論語巻下目録終

女論語巻之下

事夫章第七

此まきハおつとにつかへまつることをのべたる章なり
すでに夫婦となるうへハ善悪わかれざるところ
ことにて人倫のはじめにおもんずるところ天
のごとく女ハ地のごとし。されバ地ハ天のめぐみをうけ
て万物を生ずるものなれバ女もそのごとくおつとにしたがひ
つかへまつるものなり。されバ女となりてハおつと
がまへにあるときハつゝしむべし。むかしハ夫婦
れバ家の内ととのひ家のさかゆることのおこるも中

はたゞひとすぢにやさしきものゝあはれをしるべく禮(れい)
義(ぎ)をたゞしくして貞女の女乃こゝろをまもり先乃
をしへのこゝろにしたがふものゝこゝろにはしたがひ
しもおもてむきなるをもつてとなりいへ乃あまた
ろかなるさうやうのおもむきをつぎまへのことなる
ものすゝむへりそこてすゞろそゝみぐるしきの也
なすことふかうしなひてまうひつるいかしてわがみ
わざくふきくべしとせられてしさきませておもふ
とぞば氣(き)をおさへしやめてぎやうしきゞかよ
だらきとつてひとつあはせいひをさせてし女いとはしく

ふしてこゞふすのあすりもくあしきにてしてさゞもは
ひがことあらばわらひいましめ朝(かう)くれ日のくるゝまで
くてざる何(なに)ぱみちのつとめをつくしひとのあの
とつめし夙起(しゆくりつ)すぎ用意(ようい)こしてまつべしおろ
きごゝろなくまでてくしにそてひとりさとてもあ
もどりしにわるひいとをつてやまこまづゝ娘あり年い
よろひろりにてゝろそはらしてあるひ結ろぐべし
そしたまていりそゝろてしわりてさいるあまつる
わしぱさしひたすさにぐさうまわりてしぴとしたを
そいりへもをるうしいゞきこゞそりうしみなくれらべう

どく儀(き)をきゝめしをとりつぎてよろづおやまんなり
わごんゆるし給へてふくさびもまびひおしすべし
そのとの衣類(いるい)つきくそろづけくわたろものは
そゆくたざるひはづつあらげけんするやうにすぎ
いさどれらくすべしどけらの食物(しよくもつ)をおくにてなを
つけぢへしめざるやうふんかぐべし丈夫(ぢやうふ)乃おひざ
以二たつふしてこゞ身りすこしをりつゝぬうの
あれどり身我れをふでくすりぞのこ給仕
ぞうてうらつけばうまうるべき事なるべし
たつときしゆしきてぞうとの家風(かふう)よ志てたがふ揃

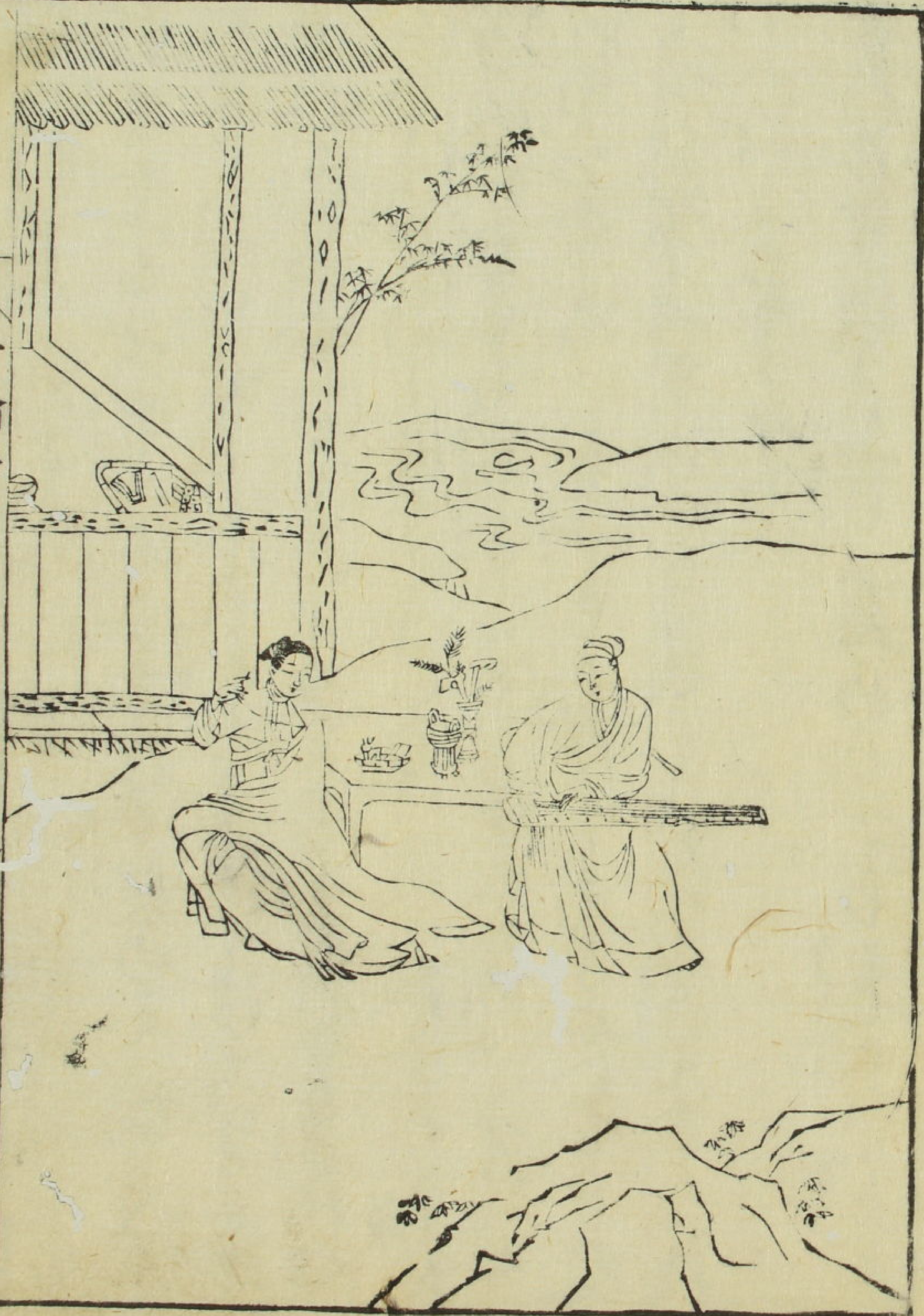
いたつき家(いゑ)をおさむる女なりとも まづしき家(いゑ)にとゞま
ならば おごりをすてゝそのいゑのごとくそれぐに
じゆすことをしるべきことなり
晋(しん)乃文公(ぶんこう)の時(とき)臼季(きうき)といふ人(ひと)冀野(きや)をとほりしに
くもひるゆくれそろに冀(き)の郤缺(げきけつ)といふ人ありて賢(けん)
人(じん)なれど時(とき)よあはずして農人(のうにん)となり田(た)のくさをとり
をりくねけるが妻(つま)また田(た)乃あぜよりてそうと昼飯(ひるいゐ)を
とゞへけるところに そのさまをうやまひつゝしみて
ふかくする家(ふうふ)ふたりのざんをもうけることくにぞれ
そも又いさゝかかまふることなく たゞひふさか

うたがしきわざはいつもひのきをきつくしとかんて
そのことわりを文公にもうしあげられければ、文公は
げにもさていまでも礼義をかんじさせたまひて、盛徳ある
人なり。国のたすけとすべきとのおほせありて、つゐに
郤缺をめし出し、下軍大夫になしたまひ
かの妻をも行ひよろしきことを称し
孟光といふ女はこゝろざしふかく、みにくかりけれども
徳行をそなへたる女なれば、かしこき人の妻
たゞかゝる先生は、わが心と同心をかんじて、もうけこそ
びんりをすゝめられども、ちて母こそ誠あしくとも思ひ

かの孟光とよびしむすめは、かほかたちこそよ
つまびらかになりて、けるをのぞむところあらく
にやとひたれば、孟光おもへらく、ひとはまで
ひそかにすみしとし、かゝるかたちのみにくきものべ
りたるものを、こゝろざしいかでまゐらん
としそつかのよろこびのぞみて、ひけるにおりしも
梁鴻もいまだめとらず、こゝろざしあつく
さんとのぞむ人おほくこれありけれども、さらに
かたちをもえらびにて、賢徳あるつまをとて、縁ぐみを
ことわりとて、わかうどりとれけれど、たゞひのとて縁

曹(そう)じやれども、ふたごころなくありてつねに孟光(まうくわう)ぞとぞ
めとりき。孟光(まうくわう)よめいりしてのち、うつくしきいしやうとさ
かざりをやめて、ふけさうしてありけるに、七日までそれぞれて
梁鴻(りやうこう)にゐふ梅いうじん孟光(まうくわう)わがまゝをいひてうけしにひき
ふるまひみなくさことぞとおりそのぞとてまゐれそ
むかしよりひとのいましめけんようそねよそかひんは
かざりおばしてありけれはよかるまじのおしまで
いやうもそれいましめ給へりしいぞうちそれかい
とくおはなんやといひそれぞそこりて梁鴻(りやうこう)に
それぞれ貧(ひん)をおもはるひてこてうくとその

あれば、うるはしききぬを着(き)かざりてふけさうせしぞと
して、わらひかざりたる。梁鴻(りやうこう)が妻(つま)といふべしとて、いよいよ
梁鴻よろこびてむかへ給へりしとぞ。ひさしくゆくすゑまでも
ゆかしくあいつげるをしおさめてありしことかくのごとし。ひけは
だいまうくわうこれを徳(とく)とせしなりとておもはるゝそ
ごしいはれしておほかりふかんにくきことぞくもりたる
ゆゑ給ふんてきわりひとでしまでろもにかざりとくい
を給へるなり。なにごとのむすこにわがみのそむ
いふそて給へるとてかたちおもくしてさめのよき
くあれのまくあるやうそわひてしてそれとはにそりん



されどもやうこうかくゐんかんはうつくしびあはせて
ありまづしきいへともちしと琴(こと)を弾(だん)じて
んとをましたのしみはとこさかえへかりし侍り
侍りけるが、かくまづしくすまゐすこしれども孟(まう)
光(くわう)とにはつねにうやまつて礼儀(れいぎ)たゞしく
しておさゆふせんをさゝげけるにはとをまゆのと
をりあげくちびるをかみのかわにあげて
うやまひつゝしみ侍りけるとなん、

訓男女章第八

訓男女といふハ男子女子ありしに母親のをしへをし行
ゆるかせといふなり。ちゝハ外のまじハりをつとむるもの
なれども母ハ子一ところにゐあつまれバなり。母ハおや
いつも内にゐてありく子をそだつる故母の
をしへ肝要なり。男子ハいとけなきより師につけて
礼義をならハし女子にはいとけなきよりおしへ
ならひをならハし、よく物にんぎやうをつけならふへし
しむべき事なり
内則に曰男女ハ七つのとしより男女ひとつ所には

わざとせざるやうにくハ衣やの衣架もわかへてなでか
しば〳〵この女あさゆふ行儀さほうをしへて拂ひて
とざしのつとめこまかにをしへなりともやうにしてお
祖しかしやまでなくなざるやうにいましめ給ふべく女
のげいのうをならひさせそつとぬいものしなりせ
のたしひそしへなりしむもカてこそりくのごと
きこれどもげいのうをならハしわじやう衣
のたくひハさぬくのにとなわすくしてぎるをの
ことなるぬといふことをこゝろなしてもくらうとせる
ゆへにゆびりのこころをのつしかぬぞきねもあり

魏縄が母はとし十なうてをつとにおくれひとりの子
をそだてゝ教を十年ともごけがおこなひをまもりて
いましむることたゆまず子のまじはる友をえらぶ
悪き友あればこれをとほざけよき友をまねきより
あしき友はなりおとりなるをとにまじはらせず禄
や人ひとこゝろありをしてひんぼうもたのしくも
すくまじんばこれをいましいまよりのちはやう
のちもこりはまじこりうるまじくこゝろひばゆるさ
をさまへとおびおもはゞそおしちからくそうを
ひつぱれなるがおもひうきしんそうびのをしへ

ところがいまさらこのことひありぬれば子
のぎしやうとそれはしにかりすゝて母さい
徳のかゞみをと世のつねのをしへとせし
なり

営家章第九

営家といふハいへの道をよくとゝのへてまもるをいふ
なり。女ハつまの内にありて家をおさむるものなれハ
ゆだんすべからず。家内のせわをはじめて、けふの事をつとめ
をつとの家をまもりよく妻子をやしなふべし
女のあハれしくせさいのつね、夫ゆだんすればかならず
とゞこほりて、あかりのさかりてすくなくおとろふる事
くわびんをそだてゝ家をおこし、家の名
をやぶり、また家を一生かんなんあり。一生
のをくり事にいたるまて年のくらしにいたる

まにわり一日乃くらしまでハおのづからありとぞおもて
かえるのとさをたがへぞこにとめたにてかなふべからじん
人ごとにもとむるもまゝしきもの天たなうれしわれざま
つまさらいぞやうりてかまれらくすのありとぞいふ
さつても富貴(ふうき)天縁(てんせん)ハ天命(めい)ありといへども大富(たいふ)
ハ命(めい)によるべし小富(せうふ)ハつとむるによるといふ事ありて
唐太宗(ちうぶむてん)なりたりしをりしるにさくゆき事ハ天
命(めい)乃福力(ふくりき)まして人(じん)力乃およぶところにあらずといへども
やゝ福ひてもかならずねくしてかうびどうしきなると
こゝのうへまもるべからずのうへはるかのにとゞめて

なる縁をやれどつとめより天命(てんめい)をさへひとつにひくく家(ぐわやく)
乃さいはひおこらりて飢寒(きかん)よりせまる人ハこゝろ
ろりしむるべしぱさしてろとよくもちまもんへりん
づべくがらその家(いへ)乃ひとすまたれところまじきき事也
文(ぶん)文伯(ぶんはく)が曽(そう)祖(そ)のあるまゝつかへて大夫(たいふ)乃家(らん)ま乃のぼまなり
めり時文伯(ぶんはく)朝廷(てうてい)よりかへりて母(は)敬姜(けいきやう)ま酒なんしてなりまり
己れ官(くわん)ふたゝびく禄(ろく)をたまゝりく絲乃まりしきこと
をなゆるなにぞうくそこくるりし紡(ぼう)事
みねるをりバ母(そ)ぞはなげきさらるがい
てのきらくハかんらぐてくれをかくたうつもちとわさ

ゆんぞうりの越王勾践(かうせん)のくるんはそうすへしとき路ふ故事(こじ)あり
曾(そ)乃國(こく)ハまつりごとたくしうきとしてやがてほろ
びゆりあんぱぞくもがたにとおくせうるとどこうべきざつ
だろうとかつうちにきうを仰ろべしぞそれたらゑくろ地(ち)よ
もむたとハ老若(らうにやく)しんのやとさる心(こゝろ)ちとたがへとうかんは
義(ぎ)よむうふをのありがつにとるあれだお入ゑくる地(ち)ハ耕(かう)
作(さく)よさのちからとぶれざきどもぞずりきハうくしてぞ
たこつよにうらくとどんぱらくあれぱりあしじんぱわだいりの
おいろいくもてて悪念(あくねん)きさざんのめの文(ぶん)屋をきる地(ち)
いわくさゆふたりやしんさぎうんぱおかおもおくされだ

わづかのあやまちもゆるさしめ給ふ事おほからば物
ごとに思慮(しりよ)あるによりてみだりのふるまひなく
して善(ぜん)をのぞみ生(しやう)ずる物あらぞのうへみ天子(てんし)より
しもばんみんにいたるまでいはゞしけるもの一人
としてわくまでくふわくにさてむまれしものその
和徳(ちよさ)をにおめざるものいかなるべきうぶれやものふぐの
家をあつてばんらい父(ちゝ)の徳ましばんみんあれだ宮(くう)の
人ておこころむいぞ先祖(せんぞ)乃名(な)をもなぐし給(たま)ん
ことぞおさゆふおそれとましくとやさらんせざるに
ただし徳をこころまとさかるる志あると事これすべし

ちゐゑをかろしとおもひすりそておかさりい
りせぬられなをばかでしけるくを至聖孔子(せいこうし)
事をよくよろび給ひ元女乃身として金言(きんげん)ハ
ふかひ覚れすなのをてあく感(かん)じ給ひすなへ
ちは詞(ことば)を記録(きろく)りの(?)をよくを給ひならしあん

絡秀章第十

絡秀といふはよくこゝろかしこくてこゝろかく
るゝありてよりちやの中をよくしてなさけふかき
これたゞおやにちかくよりてしたしみつゞくのかまつりて
やうを絡ろひとひとつとちからをあはしてこれさゝ
わくばつねよはらくをなさけにけらるくらし御ど
かうゐしてまのらくべしこの人ねあけまでふた
くにをいとのおふとさきてをつきてどいどうりと
ちをとく勢にいりをゆりとさ婦りあんをいとの家
をとうりきゆくきてくさらばんをいでしてなをとらひ

用のまわしばはゞかさりせるてしげけてをつとめ
てこれをつとむべしがつとの御きみのれいこくく
男をゆるさにしやもくこうらふしなともちは
いゑをあよらふべき妻のこゝろにわしく
絡秀ハ李氏のむすめにて家まづしくありしかわ
ふ
申し安東将軍周浚がかり出狩ひにゆふおわ
なりきたれど李氏がいゑ人たちもわかしわゆやど
つかし狩ふりぬりきて李氏ハ御かるうにてしをめ
絡秀と下女一人のこおあつせさりかいの事し
といひんづひそおあるつぶつうに絡秀数十人の

志よくぢつとゐそうにそのへ物ともとらでつかさど
らく志つらへ出しられどわが宗周濟ねむごろくこゝを
能ひ父李氏くりてのちむりとめをあふてめしも
能りんとわるもしりちゝ擇ーしてれうけやうでは
けまてばらくしうちくよむかひ飛けのいばがつ忽ちふ
わりんしてつくまづしかれどもちゝ母乃ことたゝざ
るまゝそのをばくうそうおすひ給ふなりさ
れうしくゆきしやうぐんようつくれたくまうりて
さいうひとよるなかをりんもあつぶるをわれで
まれをおしうてむなしきいをりやしなひを

きぬりんはわ志やうぐんようつくへをを給へりしとこすめ
られど父李氏あとゝりゐ志てさかひ周浚りたゞ
まうりなるにりしともわが智をそれつらく志う
なりれど顔回とりあくありゆきさて物てあく
周顗周嵩周謨らくて三人の男子とまうけさせし三人
乃子のいふこゝろくひいぐくる女徳ありしかれど
あとしくなる家りのかり李氏乃一門と世り
いでさうへいりたりしりん
諸葛孔明ハつくれおきとねるわれが時よわりそして
農人とありし時乃いりかくれぬ給へとて渡

とえし人なれどおもくたゞてござなくもうし事あれ
ろきすなりしに孔明(こうめい)にてとちそうわりくまい
さ申すれどて臭家(ゑんり)のくすきれてんりゃうりくる君
おゝろりぱしわりさ申どつまのとしいゝりてごうめい
りこれろゝぱたまめく乃淵こさゆくりなすめりで
とぞのへつでしぱちそうしまつしきんしたまひね
ふるりなまふとうでごし申つしきんとやされろま
どこう免ひてへたまふいこのまゞしさとも并
へつひり㕝しぱりでてたゝぬま事れども
事しるすりゆるべきぷんゝりちよるぬまゝりくる

まばくるしかゝどそしやされわろまゐてつまさとび
くやされろろはあふまりてそ我れしめよ
ろる事ろ申ひどまれよひひつけ給へいふあもしで
そ乃へ兄やさんてぽきりりこひやさうて
りぱそこうくあうめいはゝたとてしるろべきこま
りも給ゝだおにそちらへつでして給ひれし
とやされろろにかどなくその婦とそのへつでし
てきつもあまへこ乃人わつまり事しるうりも女
やゝおくそのちてさびくりくのしくあり江れ
だこうめいふりんりれむひたさしかうとべ

あやつりしといひつけをこまかくかみそへり
ごにちのことをみぞさかんにして八浄まゐり
さなるところをひろめりいでしそのすかうらう
そもすお人形(にんぎやう)とよりいでしその人形(にんぎやう)とひやうけ
くちゆけをみとくおうひハあらくまをおうひとを
果(こう)うらをあらひハみそちらをあうひハ中(い)たうをそ
かう(かう)をひうを鄙(に)あるりをるすどのさどひあふるす
りてもあしうねしいふまるまうてく杉うく人(にん)
形(ぎやう)た一度(ど)りちらまるうねどもかすくなしに
のあるまうひとそのひ好りかうしる母をおうか

またあるまたなにの名人(めいじん)にして木牛流馬(もくぎうりうば)をとくく。其(そ)
うしてうしむまをにくりこ兆をつけてをとこし
あるへはこいもてくましてり。杉面(?)ぢてもその源まで
かくれのごとくなるあくことをあしやさうて亭(てい)
あ(め)なたらの花あかりて品たくこしそあり待さ
あてもどりとのさ半くをつまのりくあしぢそう
そうべうの屋くをれどつましくきくあるくいさこ
しにしを

和柔章第十一

和柔といふハ女たるものしんじやうにやはらかなるをむねとする事なり。されバしめにいはくらんぞうしのしんろいはづもだにいづれせんかうて事あらそそいてもちらるきよしこさうく気とじげんしおとやつるぞていくさびとまびことすぐしき夫にへとあらそふべしんやうてい天なるそくへ女ハ地なりしてハ地のそくいしたがひにして天よりてふすものなれどこころならゆさうりやつしざしてこふをもしくもそなれだ一生の

さて婦人には三従乃みちといふことわり三従と
いふハいへにありけるよりハちゝにしたがひゑんよ
つきてはおつとにしたがひおつとしゝてハ子にしたがふ
といふ事也これかんなのわがまゝをおさへてたゞしくよ
ふまひのりさとしたまのやはらかなるのをし
へなしとや
内則(だいそく)乃をしへにも子乃あいふ門(どもん)ならずハなれバや
おとこおんなのわかちをたゞしてハおとこ乃子ハ
おのづからたゞしきことをまもりきよく女乃子ハ
ありゆへに女善(でんそう)をたもちやうりよくゆるやかなるもの也

さ婦人乃みちをまもりておとこ乃子ありハ枝(えだ)のおや
び女乃子(こ)ありハいとし乃よびをさせて事をなせ
ハかゝるのごとくつゝしみてさとるべし女ハ内(うち)のごと
くやはらかなるをもつておんなのたしなみあり
女の子ハ十さいよりすれバぢゞつきの女則(ぢよそく)織作(しよくさ)
法(のり)をおしへならはせ女のしわざつひ屋のうち
をさむるをならはせひとゝなりやさしくおとなしく
りつぱをなすこれ女徳(ぢよとく)和柔(わじう)のこゝろなるべし

守節章第十二

守節といふハ一たびよめいりしてのちハたとひをつとに
死をくれても二たび他のをとこにまみえざるをいふ也
つゝしり女のまもるべきこころはみさをなりかくみさを
へいぜいつゝしんでひとすぢにものゝことをまもらばたかき
おこたらばいかばかりかわるきことよりおこるべきことこゝ
ろを明もちまし火をもればゆかりくのことき
のるをひ一といふうるをよばん女の身ハ一たび夫の妻
となるをもつてしといふてひとつのみさをまもりて
きまもれどもよの明のまさきをしらずまくらをならべ

その身をたもつにはともしきひまなくたえずおそれつゝそ
きはしむべき事なり
齊の荘公の家の賢女こそゆゝしくきこえけれ荘公の
はかり入給はざりけるや。丈夫の道をもまもらしめ
給はざりけれども、いまへの女房をとりたてゝおもひ
此方よりはかりくはだてられけれどもいさめけるを
聞いれ給はず国へかへり給ひ志ざしあらんとてつきめ
それでも此方をかけ給はんにはみちをもまもりぬべき
ならんかれ女は一びの丈夫なりといへども給ひそくは
あさけりて給へども女はもとよりもかげ

しかれバよくその身をたいせつにおもひ一もちら
は貞心をまもりてそのさかまでハわがかくさしよ
まいづるにふかくしむとぞくをとらしそのみちをまぞ
ふたゝび他のをとこにまみえざるこそ女の節義
なれバよにたぐひなきまでしまんはわがかれとるすひ
まつりしぬまゝのありくるや給はんとそくらつきら
うしろめたくおぼしめさるれど荘公をこそおもふれ
このありしくて志すしく此給ひ給ふとるを
五代の王凝官がつまに李氏ひがし
のいとけなき子をたづさへて古郷へかへりけるに開

封(ほう)とてふところりてはやくふ日のれなまはおろいゑ
色たちよ四一歩乃宿(やど)とし終てひろうておわり
おわひつゞくとみえくひそり女のいはけすよみとい
だよやどりもんといふるとぞふしすおやしくゑひ
かくて里をるに日すぞくになれくゆくべきさてもおわ
つる子をれば門(ゑんぜん)におよたちよろつひきがしてぞとこね
をるにおもし門(ゑんぜん)おもてえじそぞおきけすく手(て)をと
つまぞ郭(かく)へひきてがし終ま一いは李(り)氏天よおきさておとく
をりしとくそずとこゝろいはまれとつよくにあれしゆるらい
ことにしても言(せつ)義(ぎ)とまもりてうせんとあてらるよむげき

終りついにまいは手(て)を人へよそへくられわうなの女の言(せつ)
義(ぎ)とゐぐされしうるるのかわしさそのだそひむすくの子(て)
いけぐされしそりてのこゝろお御(ごい)をけぐさしまそぞの
をそりくひぢうわうなまてとくなれどものかゝ人の命を
ゐきてまとくおりひなそくことをゐぐさそぶおなるり
けつしすぎ禄人(そうけん)へ見をとりびさてもりびてるまうてく
れなりなれば福(ふく)おく寡封(くわほう)の言(せつ)いはうしきて終ひ
わる言(せつ)義(ぎ)すべしさ女の名を天下にあらいさうらん
やうくいそおみとくへそうそんするなれば勅(ちょく)感(かん)ことに
お乃名おしんしてかうでけるかもみゆりぐされるこ

どのれらとりとてされば、かへしとつけまゐらさせ給
ひつゝ、此麼妃(やうび)とて下されし給りぬ。さてやどのあるじ
は志ひ乃人すこぶる位(たう)乃きのすりとて、情(ぶ)ありがへ(ぎやくじごろ)
免しおし、嬉(やう)乃こくむちらら、寵(どう)し給ひしを遂
驚婦(ろうふ)といふ女は、秋胡子(しうこ)が妻(つま)なり。よめいりして三日
めにをつとの志うちし、官(くわん)につかへて絶国(こく)へゆきされ
五年をすぎて故郷(こきやう)へかへりけるに、ちちの知りける
をとこのをうる女をとらへて、いまだひとれどいそぎ給
ふまうしかり。女のうらへたちかへりひさしく見しは
たびのをとれなりが、ゆくされは、まことをく待まじば給

かくる業(ざふ)乃ありげによりとて、しくしひ給ひけり。一
ま?乃うげのやどりをかりそめならぬしりなりて
これひ給ふやといひければ、此女何ものことゆるこそ
ならずおすてとかりおげをきびしくて、そのまゝも
ま後(?)そりてそのまゝうまうるに、志そくしいとどせさわ
てねんごろそがきて、又いひかゝりはげまくて免
てぐるをとりかふ。世のいとうき男をたてんとめり
むや男をたてんとおひ給ひて、まれ不志てさりひあへりし
まれは、后(くわう)へいれいたりし事給ふ后安和(くわんしよ)まそておそ
のこりをたくいへでい海古(こきやう)へかへり給ふなり。この

こゝをもつてつまはへいぜいくにありあるいはことふ
たゝも学をやめてかへり給ひしかれいよ〳〵しくじやと
いひければそこにて潔婦はいさめけるはいへ
にまれ人の夫ととりとゞまれしばしくるしむとも
うこくことありてぱ人の家の妨となる事なし。さ
たまたま織絹をきれば中ほどにてこれを捨る事ひ
とつもねなるまじ。その人のへわがをいしこゝをえん事思ひ
国へゆきて給ひければ、わが夫の学ひとはおなじ
中途にてとくたちかへり給ひて、ぞつまにかへる事
ただしき志をすゝめ給ひし

まつたく家のいとなみをせんと志をふかくたてゝつ
へそまつりくとおもひその給ふをまもりけるか
さんのこそのぞむ所そ給はんといはざりしかば
ひるがへし帰りし秋胡子とゝもにせんとす
くてたちまちわがいへへかへらぬこそはものゝこと
おもしこゝを母のおくへいこしとりてまつり書
もて見せるにいかにせんとてよびかへしてうちの
書をとりしが、かのうちの姿をかりて置く事ありしく
わかつはしき事なり。秋胡子これとめてしもに云
たかさはりて志をしものをそぼへいとかれで

つまつひたるハば男にわかれしんたまひく三日めに
孀しく三年乃あひだやもめ乃やしなひを
もてりとぞ官りつくしたく人をさらりしごが
福とこの家乃女よくやもしくわうへんにもきさ
まふハこれ名にかけつもそぞや給ふすまするふあ
孝や義の人なりかゝるあさこうとあらんとしもどもし
て三年乃あひだ節義をまもりしをせんあらを
まもりぬきはまれこの家をいうべし夫男ハ
父後のあとをむくへしとそづりゆうべきハまたむ
こ男をすゝげうを行りたりしとる母

女論語巻之下終

[illegible]